

# 大学で再び読む「春はあけぼの」と 「古典離れ」のはじまり

岡 田 万里子

桜美林大学リベラルアーツ学群

Rereading the Opening of Pillow Book: How Students  
Become Less Interested in Reading Classics

OKADA Mariko

College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

キーワード：古典離れ 古典文学 古典教育 アクティブ・ラーニング

枕草子 春はあけぼの

## はじめに

2018年3月、高校国語の科目編成を大きく再編する新しい高等学校学習指導要領が告示され、国語教育に関する議論が紛糾した。文学を国語から排除する動向が批判を浴び、2020年6月には日本学術会議の提言「高校国語教育の改善に向けて」が発表されたが、再編方針が再考されることはなく、議論も低迷し、現在は2022年度の実施を目前に教科書検定を終えたところである<sup>i</sup>。その一方で、2008年に中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」において大学教育におけるアクティブ・ラーニング導入を提言し、近年の学習指導要領で促進が明記されている小・中・高等学校と同様、新しい教育法が大学における教育でも議論されている。今日では、日本の古典文学を題材とした大学におけるアクティブ・ラーニングの実践報告やその成果の検討も見られるようになった。筆者も2016年度に新設した基礎教育科目「自然理解（日・中・英文学における「自然」）」において、『枕草子』初段「春はあけぼの」を題材にグループディスカッションを行った。本稿では、この授業に大きく寄与した高校古典教育を検討し、高校や大学の古典教育をめぐる問題を考察する。特に、古典教育の衰退の要因となった「古典離れ」、これと付随した「古典に親しむ」という目標設定、さらに現代語訳に関する問題を指摘したい。

## 1 大学で再び読む「春はあけぼの」

### 1-1 基礎教育科目「自然理解（日・中・英文学における「自然」）」の概要

「春はあけぼの」の大学における授業実践報告には、竹久康高による高知大学教育学部の専門演習Ⅰ（古典文学ゼミ）の紹介がある（竹久康高 [2019] [2020]）。高校国語の授業案を応用したものであるが、専門教育の大学生らしく、句読点の位置で意味が変わるといふ気づきがあり、語の選択に関心をもったと報告される。「漢詩文の見方をもとに、清少納言が自然の持つ美に気づく」という構造を理解する目的のもと、古典に表れている「見方」を現代社会において働かせる課題があり、著者の意図通りに課題を行った学生は少なかつたようだが、「和歌や漢詩世界の見方で現実世界を実際に眺める」ことによる発見を促している。8名の専門課程の学生を対象としたこの授業に対し、本講で扱うのは大学一年が主たる履修者となる基礎教育科目である。

「自然理解（日・中・英文学における「自然」）」は、2016年度から毎年秋学期に開講されており、日本文学と中国文学と英文学の教員3名で開発した科目である。「自然」という時代や地域を超えて共有されてきたように思える概念を再考することを目的とし、3カ国の文学にみられる「自然」の表現を比較し、歴史的変遷や影響関係をふまえて検討する。授業は、①各国の自然条件と文化的・文学的表象、②自然とは何か／自然はどう捉えられてきたか、③自然とどう関わるか、④未知の自然／自然観と出会うときの4テーマから構成した。

この授業は、文学からのアプローチにより、自然もまた1つのテキストとして読まれるとの理解を学生に促すよう設計された。日本における「自然」は明治の訳語であり、それ以前は現在の「自然」が示すような概念は成立していなかったが、和歌をはじめとする文芸に現在「自然」と考えられる事物が描かれている例は枚挙に遑ない。学生は、日本は自然が豊かで、古来自然に親しんできたという一般的なイメージをもっており、「自然」という概念がなかったという状況に戸惑うことになる。描かれた「自然」を再考することは高く難しい目標と予想された。

『枕草子』初段「春はあけぼの」は、この目標に有用な題材と考えられた。高校までの国語の定番教材として学生が繰り返し学んできているため、文意を理解しており、内容の考察に入りやすいと思われたためである。「自然」を理解することが科目の目標であり、いわゆる講読科目でもないため、履修者が古典を原文で理解するかどうかは無関係である。履修者のなかには留学生もおり、日本の高校教育を全員が受けているわけでもない。そうした学生にもわかりやすいように、授業では現代語訳の付されている『新編日本古典文学全集』（小学館）を利用した。

### 1-2 グループ・ディスカッションの成果

この科目は、日本文学の回だけではなく、グループ・ディスカッションを取り入れて、

学生に思考させ、議論させ、自ら気づくような授業設計を心がけていた。アクティブ・ラーニングをとり入れ、相互に学び、相互に刺激を受けるように設計したのである。前述のとおり、日本の小中高教育を受けておらず、初めて「春はあけぼの」に接する学生がいたとしても、対話を通して他の学生から学習体験を聞いて考察を深めることができ、またその体験を話す学生も話すことにより自己の体験を客観視することができる。

ディスカッションによって、履修者は「春はあけぼの」に描かれた自然が視覚中心であること、邸内から屋外を眺めている様子であること、絵画的描写であることなどの特色を見いだして行った。この対話を促進するため、アイスブレイクとして好きな季節や時間帯を話し合わせており、自ずと現代の感覚と比較することとなった。百人一首の和歌を合わせて検討すると、「春はあけぼの」に発見した特色から、「自然」といっても現実の自然ではなく、記号としての自然が再生産されていると導くことができた。

授業の感想には、『枕草子』の記述内容をはじめて考えたという文言が並び、古典を批判的に考えることが新鮮だったというものもあった。一回の授業のさらに一部に過ぎないが、「春はあけぼの」を通して学ぶ自然観は授業目的に叶っていた。これだけの成果は、各履修者の高校までの学修効果によるところが大きい。十分な素地があったからこそ、内容の検討が可能となったといえるだろう。

### 1-3 高校までの「春はあけぼの」の学習

「春はあけぼの」で始まる『枕草子』初段は、もっともよく知られた古典の一節であり、小・中・高校と繰り返し学習されてきている。平成23年度～27年度使用の小学校教科書では、東京書籍5年下「古文に親しもう」、学校図書5年上「随筆を書こう・わたし風枕草子を書かせる」、光村図書5年上「声に出して楽しもう」及び三省堂6年上、教育出版6年上に掲載されている。中学校教科書では、三省堂が1年、東京書籍、教育出版、光村図書が2年、学校図書は3年の教科書に掲載している<sup>ii</sup>。高瀬桃華は、小中学校を経て3回目となる高等学校で、生徒が飽きずに古典への興味・関心を持つ契機に繋げるためにと、本文比較の教材案を示している（高瀬桃華 [2020]）。

高校国語は、冒頭に記したように、2022年度から新学習指導要領によって科目が再編されるが、現行では共通必修教科科目として「国語総合」（4単位）があり、選択科目として、「国語表現」（3単位）「現代文A」（2単位）「現代文B」（4単位）「古典A」（2単位）「古典B」（4単位）がある。古典文学を扱うのは、必修の「国語総合」と、選択の「古典A」と「古典B」である。平成22年（2010）『高等学校学習指導要領解説 国語編』によると、「古典A」は「言語文化について探究」し、「古典B」は「読む能力を高める」という違いがあるが、単位数が異なり、2021年度の教科書の冊数は「古典A」は計154,554冊、「古典B」は1,088,974冊、「古典B」が二冊に分冊されている教科書もあるため、件数にしても712,940件であるから、「古典B」を選択している生徒の方が4.5倍多いことがわかる。

これらの検定教科書における「春はあけぼの」の掲載の有無を調べたのが、表1である。

<表1> 高校国語検定教科書における「春はあけぼの」の採用

●国語総合(9社24点中6社14点を採用)

出版社	書名	教科書記号 番号	冊数	件数	占有率	春はあけぼの
1 東京書籍	新編 国語総合	国総   332	176,922	176,922	14.6	△ 古文に親しむ(春・夏のみ)
2 第一学習社	高等学校 改訂版 国語総合	国総   360	87,674	87,674	7.2	
3 東京書籍	精選国語総合	国総   333	85,399	85,399	7.0	△ 参考
4 第一学習社	高等学校 改訂版 標準国語総合	国総   361	82,800	82,800	6.8	
5 東京書籍	国語総合 現代文編/古典編	国総   334-5	154,495 *	77,247	6.4	△ 参考
6 第一学習社	高等学校 改訂版 新訂国語総合 現代文編/古典編	国総   358-9	138,828 *	69,414	5.7	
7 大修館書店	新編 国語総合 改訂版	国総   347	66,461	66,461	5.5	○ 山口洋直「なまてスナホを光景の1―春はあけぼの」
8 大修館書店	国語総合 改訂版 現代文編/古典編	国総   344-5	96,802 *	48,401	4.0	○
9 数研出版	改訂版 国語総合 現代文編/古典編	国総   348-9	93,468 *	46,734	3.8	○
10 筑摩書房	精選国語総合 現代文編/古典編 改訂版	国総   355-6	93,484 *	46,742	3.8	
11 大修館書店	精選国語総合 新訂版	国総   346	44,650	44,650	3.7	○
12 三省堂	精選国語総合 改訂版	国総   338	45,528	45,528	3.7	△ 日本語の響き(春のみ)
13 数研出版	改訂版 高等学校国語総合	国総   350	43,169	43,169	3.6	○
14 数研出版	新編 国語総合	国総   351	36,771	36,771	3.0	△ 古文に親しもう(春・夏のみ/現代語訳あり)
15 第一学習社	高等学校 改訂版 新編 国語総合	国総   362	35,422	35,422	2.9	○
16 三省堂	明解国語総合 改訂版	国総   339	34,777	34,777	2.9	△ 古典の響き(春・夏のみ/現代語訳あり)
17 桐原書店	新探求国語総合 現代文・表現編/古典編	国総   363-4	71,278 *	35,639	2.9	
18 教育出版	国語総合	国総   342	32,473	32,473	2.7	
19 明治書院	新高等学校国語総合	国総   354	28,980	28,980	2.4	
20 三省堂	高等学校国語総合 現代文編/古典編 改訂版	国総   336-7	43,100 *	21,550	1.8	△ 古典の響き(春のみ)
21 教育出版	新編 国語総合	国総   343	21,020	21,020	1.7	△ 古典の一部を省略しよう(春のみ/現代語訳あり)
22 明治書院	新精選国語総合 現代文編/古典編	国総   352-3	42,081 *	21,040	1.7	
23 筑摩書房	国語総合 改訂版	国総   357	17,686	17,686	1.5	
24 教育出版	精選国語総合 現代文編/古典編	国総   340-1	16,576 *	8,288	0.7	
			1,589,844	1,214,787	100.0	

●古典A(7社11点中2社3点を採用)

1 第一学習社	高等学校 改訂版 標準古典A 物語選	古A   314	48,582	48,582	31.4	○
2 大修館書店	古典A 物語選 改訂版	古A   315	31,539	31,539	20.4	
3 東京書籍	古典A	古A   301	30,312	30,312	19.6	
4 教育出版	古典文学選 古典A	古A   302	15,557	15,557	10.1	
5 第一学習社	高等学校 改訂版 古典A 大鏡 源氏物語 諸家の文章	古A   316	12,947	12,947	8.4	
6 三省堂	古典A	古A   306	5,779	5,779	3.7	
7 筑摩書房	古典A(古文・漢文) 物語・史伝選	古A   312	3,894	3,894	2.5	
8 文英堂	源氏物語・大鏡・評論	古A   304	2,846	2,846	1.8	
9 文英堂	説話(古今著聞集・沙石集・十訓抄・竹取物語) 随筆(徒然草・枕草子・方丈記・常山紀談・花月草紙・蘭東事始) 故事・小話 漢詩 史話	古A   303	2,001	2,001	1.3	○
10 文英堂	徒然草 説話(古今著聞集 十訓抄 宇治拾遺物語 古事談 今昔物語集) 枕草子	古A   311	963	963	0.6	○
11 文英堂	物語(竹取物語 伊勢物語 大和物語 落窪物語 源氏物語 堤中納言物語) 和歌(古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集) 随想・日記(枕草子 和泉式部日記 紫式部日記)	古A   309	134	134	0.1	
			154,554	154,554	100.0	

●古典B(10社19点中7社10点を採用)

1 第一学習社	高等学校 改訂版 古典B 古文編/漢文編	古B   350-1	141,972 *	70,986	10.0	○
2 数研出版	改訂版 古典B 古文編/漢文編	古B   343-4	136,765 *	68,382	9.6	○
3 東京書籍	精選古典B 古文編/漢文編	古B   331-2	130,679 *	65,339	9.2	
4 第一学習社	高等学校 改訂版 古典B	古B   352	53,759	53,759	7.5	○
5 東京書籍	新編古典B	古B   329	53,515	53,515	7.5	
6 第一学習社	高等学校 改訂版 標準古典B	古B   353	53,044	53,044	7.4	○
7 大修館書店	精選古典B 改訂版	古B   341	42,993	42,993	6.0	
8 三省堂	精選古典B 改訂版	古B   335	39,210	39,210	5.5	○
9 大修館書店	古典B 改訂版 古文編/漢文編	古B   339-40	75,077 *	37,538	5.3	
10 桐原書店	新探求古典B 古文編/漢文編	古B   354-5	73,470 *	36,735	5.2	○
11 東京書籍	精選古典B 新版	古B   330	36,474	36,474	5.1	
12 筑摩書房	古典B 古文編/漢文編 改訂版	古B   348-9	64,988 *	32,494	4.6	○
13 三省堂	高等学校古典B 古文編/漢文編 改訂版	古B   333-4	60,294 *	30,147	4.2	
14 大修館書店	新編古典B 改訂版	古B   342	24,534	24,534	3.4	
15 明治書院	新 精選古典B 古文編/漢文編	古B   345-6	45,898 *	22,949	3.2	○
16 明治書院	新 高等学校古典B	古B   347	15,884	15,884	2.2	○
17 教育出版	精選古典B 古文編/漢文編	古B   336-7	22,922 *	11,461	1.6	○
18 教育出版	古典B	古B   338	9,727	9,727	1.4	
19 教育出版	新編古典B 言葉の世界へ	古B   309	6,148	6,148	0.9	
20 文英堂	古典B	古B   356	1,621	1,621	0.2	
			1,088,974	712,940	100.0	

※冊数・占有率は、「1・5・6減」の2949万冊 ●21年度高校教科書採択状況一文科省まとめ(上)、『内外教育』2021年2月12日号、6-12頁による。

※冊数の\*は、分冊。これら分冊を1/2としたものを件数として表記した。

＜表2＞ 出版社別「春はあけぼの」  
掲載教科書点数

	国語総合	古典A	古典B
東京書籍	3/3	0/1	0/3
三省堂	3/3	0/1	1/2
教育出版	1/3	0/1	1/2
大修館書店	3/3	0/1	0/3
数研出版	3/3	0/0	1/1
文英堂	0/0	2/4	0/1
明治書院	0/2	0/0	2/2
筑摩書房	0/2	0/1	1/1
第一学習社	1/4	1/2	3/3
桐原書店	0/1	0/0	1/1

「国語総合」は9社24点の検定教科書中6社14点に抜粋も含めて掲載され、「古典A」は7社11点中2社3点、「古典B」は10社19点中7社10点に掲載されている。表は占有率順に記してある。「国語総合」は必修科目であり、分冊分を半減させた件数でも1,214,787件あり、そのうちの680,732件56.2%に「春はあけぼの」が掲載されていることがわかる。選択科目の「古典A」「古典B」は合計件数も867,494件なので、「国語総合」の7割強でしかないが、「古典B」における「春はあけぼの」掲載数は404,904件56.8%である。しかも、「国語総合」で占有率上位にありながら「春はあけぼの」を掲載しなかった三点の教科書の発行元の第一学習社は、「古典B」のすべてに掲載する。出版社別に見ると、表2のとおり、「国語総合」に掲載する東京書籍、大修館、数研出版と、「古典B」に掲載する第一学習社、明治書院、筑摩書房、桐原書店に分けられるようである。

「国語総合」占有率第1位の東京書籍は、3点ともに「春はあけぼの」が掲載されているがいずれもコラムや付随的な扱いではあった。大学進学用とする『国語総合古典編』（国総335）は「随筆1」の『徒然草』に続き、「随筆2」として『枕草子』をとりあげ、第43段「虫は」、第207段「五月ばかりなどに山里に歩く」、第72段「ありがたきもの」の後に「参考」として初段を掲載する。スタンダードを謳う『精選国語総合』では、「日記と随筆」として『土佐日記』と『枕草子』をとりあげ、第207段「五月ばかりなどに山里に歩く」、第26段「にくきもの」に続き、やはり「参考」としてあがる。『新編国語総合』では、古文編の冒頭に「古文に親しむ」として「豊かな古典世界への第一歩として、古典の文章を音読してみよう」と『竹取物語』『枕草子』『源氏物語』『方丈記』『平家物語』『徒然草』『奥の細道』の冒頭があげられており、『枕草子』初段からは春と夏が記されている。このような付随的な扱いは、すでに小学校中学校で学んで来たと思われる「春はあけぼの」では、生徒が飽きると想定したからか、また文法や語彙を学ぶためには適当ではないと判断されたからだろうか。同じ傾向が三省堂の「国語総合」にも見られるが、これらは例外的で、多くの教科書は学ぶための本文として、「春はあけぼの」を掲載している。

ユニークなのは大修館書店の『新編国語総合改訂版』である。66,641件5.5%で占有率は7位であるが、「随筆の楽しみ」として、「春はあけぼの」を掲載し、併せて「さまざまな「春はあけぼの」として、杉本苑子、田島伸夫、山口伸美による現代語訳と、Ivan Morrisによる英訳、サメマチオによる漫画を掲載して、「夏・秋・冬の創作を作ってみよう」と促す。また山口伸美「なんてステキな光景なの！——春はあけぼの」（『すらすら読める枕草子』講談社、2008）も掲載し、これらをあわせて読み、「この章段の特徴や魅力を考えてみよう」と書いている。

同じ大修館書店の『国語総合 改訂版古典編』には「学習のポイント」として、「作者がおもむきを感じている四季それぞれの時間や景物について、整理してみよう／作者の自然のとらえ方と我々の感じ方とを比較して、話し合ってみよう」(43頁)とあり、『精選国語総合新訂版』(大修館書店)ではこれらに加え、「『徒然草』の「をりふしの移り変はるこそ」とも比較してみよう」とある。同教科書の指導資料『精選国語総合新訂版指導資料3』には、この問いの解説として、次のように記されている。

四季それぞれの特徴を、あけぼの、夜、夕暮れ、「つとめて」に求めた作者の感覚への共感と自分なりの感覚を対比させ、また、春の繊細なものの見方、夏の蛍をとらえる視覚の鋭さ、一転して秋では聴覚で対象をとらえているような感覚と、季節感についても注意させたい。冬で早朝の寒さこそ冬らしいとする清少納言の季節感にも賛否両論を出させたい。

また、『徒然草』「をりふしの移り変はるこそ」との比較についても、生徒にそれぞれ考えさせたい。「春はあけぼの」では、四季の景物はおもむきのある時間との関わりの中で挙げられている。「をりふし」にあるようなさまざまな花々や年中行事などは取り上げられない。それに比べて「をりふし」は時間の限定がなく、挙げられる景物も多い。四季の中で文章の量が多いのも、「春はあけぼの」は秋、「をりふし」では冬(本教科書では未採録)、次いで春であるという特徴も指摘できる。(155頁)

大修館書店以外の教科書指導書にも、『枕草子』と清少納言の解説や参考資料として関連のエッセイなどの資料は多く挙げられてはいる。しかし、大修館書店の教科書のように、教科書掲載の設問から「春はあけぼの」の内容に関する議論を促す教科書は例外的である。他の古典と比較して『枕草子』に描かれた宮廷生活を理解させるといった設問は、内容の検討のための優れた取組である。作者の自然の捉え方と我々の感じ方を比較させるといった試みは、高校生にとって難しくはなかっただろうか。大修館書店の「国語総合」3点は、合計して占有率が13%強である。『枕草子』の単元の授業での実施状況は不明であるが、このような充実した構成で内容の検討への明確な方針が打ち出された教科書の存在は、こうした授業が行われていたことを示している。この経験があれば「自然理解(日・中・英文学における「自然」)」におけるグループ・ディスカッションを牽引できただろう。

## 2 画策された「古典離れ」

### 2-1 「古典離れ」のはじまり

しかし、大多数の教科書に掲載された「春はあけぼの」は、書かれた内容の考察ではなく、語彙や文法を中心とした指導が標準的に行われてきたことを示している。むしろ、教科書や指導書には記載がなくとも、多くの授業実践報告に見られるように、現場の教員の

努力と工夫により内容の考察が進められていたかもしれない。それにしても教科書からみる高校国語の古典教育は旧態依然としており、古典教育が受験のための暗記科目として嫌われ、科目再編をはじめとする改革が何度も試みられても成功しなかった現状と合致している。「古典離れ」が言われて久しく、近年では古典教育の不要論が唱えられている。

大学における古典教育は、高校の古典教育の影響を受け、大きく後退してきた。古典の専門教育に40年間携わってきた塩田公子によれば、40年前の国文学科は「大学一年生に変体仮名の読み方を指導して、古典作品の演習は写本の影印をテキストに使うことがなんの違和感もなく、困ったことも生じなかった時代であった」（塩田公子 [2016] 154頁）という。新典社の伊地知鐵男編『増補改訂仮名変体集』が1966年刊、笠間書院の松尾聡編『字典かな－出典明記－改訂版』が1972年刊、武蔵野書院の中野幸一編『変体仮名の手引』が1978年刊で、これらの出版社からその頃相次いで古典文学作品の影印の教科書が刊行されている事実からも40年前の大学国文科における講読の様子を推測することができる。塩田の記述からも影印の教科書の出版数からも、当時の国文科の演習では、変体仮名で書かれた古典の本文をテキストに、解釈が行われていたのだろう。

しかし、同時期に「古典離れ」が言われはじめていたこと、さらにその意味が変化してきたことも考慮しておかなければならない。今日でこそ、「古典に接することが少なくなっている」あるいは「古典を理解する能力が不足している」という意味で使われる「古典離れ」の語であるが、1970年代にこの語を用いて議論を始めた文化庁国語科専門員であった小林一仁は、積極的に「古典に接する機会を減らそう」という意味で用いている。教科書を刊行する東京書籍の『高校通信東書国語』1976年9月号に、小林は「『国語』は日常の言語生活を中枢に（試論）－古典離れ、文学離れの『国語』へ」と題した論考を寄せる。この内容は、文学中心の国語教育から、「日常の言語生活における言語の諸問題を学習指導の中枢にすえる」（小林一仁 [1976] 6頁）必要があるという、近年の議論に直結するものである。小林は、古典について以下のように述べる。

これらは、学習指導を行う教室活動では、人間形成、文化遺産の享受、文学享受、言語感覚の陶冶、といった目標のもとに選出されたものであろう。しかし、根源的に、国語の目標が日常の言語活動を営むための諸能力の育成にあるとして見直すと、それらはかけ離れた存在となり、率直に言って知識・教養としては必要であっても、日常の必然性をもっては登場しないこととなる。（小林一仁 [1976] 8頁）

小林は、文学についても同様に「主題・構成・叙述・登場人物の心理などを把握する文学作品の読解、鑑賞とは視点を変えた読み方を開発する必要も生じるのではないか」（小林一仁 [1976] 8頁）と述べる。この背景には、「誤字だらけの文章を書く大学生、挨拶のできない新入社員、待遇表現のでたらめな社会人など、日常の社会生活を営む上での言語の能力がどうなっているのだろうか」という指摘は、別に耳新しくもない」（小林一仁

[1976] 9頁) という状況を説く。つまり、小林が主張したように国語教育は「聞く」「話す」単元を増やしてきているにもかかわらず、この問題が40年間改善されてこなかったこともわかる。しかし、小林がこのように「古典離れ」の語を使用して積極的に古典から離れるべきだという議論をするほど、古典が国語教育において、また実生活においても身近であったと推定できるのではないだろうか。

しかし、その後数年で、現在と同じ用法での「古典離れ」が指摘されるようになる。管見では、1983年1月『月刊国語教育』3巻1号に掲載された小口倫司の投稿原稿「新教育の発掘－古典離れの生徒をどうするか」が早い例である。長野県立岡谷南高校の国語教諭だった小口は、古典を嫌い、参考書の丸写しをする生徒を相手に、独自の教材を用意して「自分で辞書を引いて他の力を借りず、自分の力で古文を読解させ」(小口倫司 [1983] 81頁)る授業を実践し、その報告を投稿した。この間、1978年の高等学校学習指導要領の全面改訂(昭和57年4月施行)があり、小口も冒頭に「学習指導要領の改訂にともない約二〇年ぶりに、かつての総合版教科書が帰ってきた」とし、「古典教材の軽視といえはやや言い過ぎであろうが、その傾向は顕著であろう」と述べている(小口倫司 [1983] 80頁)。すなわち、現場の高校国語教師がそのように感じ、しかしながら、その制約のなかでも工夫をして古典の読解力を養っている様子がわかる。

1985年には、大久保廣行「高校生の「古典離れ」を食い止めるために——若き国語教師への提言」が都留文科大学国語国文学会の『国文学論考』に掲載された。小口の投稿から2年が経っており、また新学習指導要領施行から3年が経過している。大久保も「古文・漢文に限っていえば、「国語Ⅰ・Ⅱ」に含まれているものは少なく、「古典」も学校必修が半数にも満たない現状からすれば、時間数の削減と相俟って、従来より比重が軽くなったとの印象は免れない」(大久保廣行 [1985] 17頁)と書く。そして、「一葉はもちろんのこと漱石・鷗外さえすっかり縁遠くなってしまった今の高校生には、古文はまさに外国語にも近く、きわめて馴染みにくいものとなっているようである」(大久保廣行 [1985] 17頁)と、今日と同じ意味で「古典離れ」が使われたのである。

## 2-2 古典教育における「親しむ」の目的化

大学国文科における日本の古典文学教育が専門的に行われていた40年前から、高校国語で「古典離れ」が計画され、そして「古典離れ」が問題視されるようになった。問題の端緒は昭和57年(1982)施行の学習指導要領であろう。学習指導要領には、常にその教科を学ぶ目標が記されているので、その目標を検証してみたい。

1978年の学習指導要領では「国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる」、「古典としての古文と漢文を読解し鑑賞する能力を高め、ものの見方、感じ方、考え方を深めるとともに、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」(文部科学省 [1978])とある。現在の新学習指導要領の「国語」の目標にも「国語を的確に



理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」「言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」(文部科学省[2017])とあるから、1978年改訂版の目標は現在の目標に含まれていることがわかる。

しかし、古典に関しては、「我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする」(言語文化)、「言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」(言語文化)、「我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする」(古典探究)、「生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」(古典探究)(文部科学省[2017])と具体性が見られない。

1976年に「古典離れ」を標榜した小林一仁は、国語教育の目標について、次のように記している。

「国語」、なかんずく文学の授業を通して、人間形成を図るといえることが言われる。これも教科の目標であることは否定できないが、この人間形成という目標は、「国語」という教科が背負うべきもっとも重要な直接の目標ではなく、むしろ教育という全教科を包括したところにあるものである。では、「国語」という教科のもっとも重要な直接の目標とはいえば、それは言語そのものの問題にかかわるものの中にある、とすべきである。言語は、自然現象や人間事象にかかわる何ものかについて認識することを可能にするものであり、また人間は言語をもって思考するし、あるいは言語は思考そのものである、また言語は相互の人間関係における意志や感情の伝達の道具である、また言語は思考そのものであるゆえに、創造であり発見でもあるであろう。「国語」の教育は、こうした言語の本質や機能について知識として体得し、日常生活において自在のものとするようにすることにある。(小林一仁 [1976] 7頁)

すなわち、人間形成は教育そのものの目的であるから、「国語」の教育目標は言語中心とすべきだと述べている。しかし、国語教育の目標に人間形成を掲げているのは、むしろ前掲の学習指導要領の方である。こうした漠然とした目標では成果も検証できないためだろう、国語教育の現場では実践的な目標が掲げられた。独自教材による授業を紹介した小口は古典の読解力養成を目標としており、前掲の大久保廣行も同様である。

大久保は、「いわんや祖先の残した文化遺産の継承とか言語文化に資するためとかいった目的意識を持って学習に取り組む者は皆無に近いだろう」(大久保廣行 [1985] 17頁)と学習指導要領の空論を批判し、「現在の状況下で教室で何ができるかという、実現可能な具体的方策に目を向けた方が生産的であろう」(大久保廣行 [1985] 17頁)と具体的な提言を行う。その提言は、以下の6点にまとめられる。

まず「教科書を軸に、自分の最も教えやすく生徒に最も適した独自の教材等を編むべき」(大久保廣行 [1985] 19 頁)とし、次いで音読の重要性を説き、第三に「単に文章だけを読ませるのではなく、関連の副教材を利用して視覚的あるいは聴覚的に訴えて、古典の世界に遊ぶ楽しさを味わわせてやること」(大久保廣行 [1985] 20 頁)、第四に「教師中心の講読形式も大切だが、一学期に一、二度はある程度まとまった時間をとって、生徒の活動を主体としたものがあるといい」(大久保廣行 [1985] 21 頁)とし、第五に「文章の正確な把握に立たない古典論は、単なる恣意的な観念論でしかないことも厳しく教える必要がある」(大久保廣行 [1985] 22 頁)として古典読解の基本的手続きを身につけさせることを説き、第六に古文を訓詁注釈型の授業に終始して現代語への置き換えにとどめるのではなく、現代文的な内容探求をさせるべきだとした。

これらの提言のうち、最初の独自の教材を用意するという点は昨今の教員の多忙さや定番教材の固定化から最近の議論にはあまり見かけないが、第二の音読、第三の視聴覚資料の導入も現在でも多くの教科書の指導や挿絵に見られ<sup>iii</sup>、第四はまさしくアクティブ・ラーニングと通じるものである。そして、第五と第六に述べている古典読解の基礎力養成や内容探求の二点は手段でありながら、同時に古典教育の目標としても読むことができる。

第五の読解の基礎力養成は、「生徒たちの興味と関心を喚起し、もっと古典を読みたいとの自発的欲求が生じた時、いかにして有効かつ正確にそれを読み解くか、その手段としての基礎的手続きをきちんと身につけさせることはきわめて重要なことである」(大久保廣行 [1985] 21-22 頁)としており、高校国語の授業としては当然であり、かつ重要な目標である。第六の現代文的な内容探求に関しては、次のように述べ、作品そのもの考えることを重要な手段であり目標であるとして特筆している。

古文と現代文とでは、訓詁注釈型と内容探求型という二極に分代して、授業のしかたにかなりの隔りがあるようである。古文を文章として理解するために読解の作業に精力が注がれるのはある程度やむをえないことではあるが、そこでいつも終止するのであれば、単なる現代語への置き換えにとどまって作品そのもの考えたことにはなるまい。つまり、そこから先の扱い方がやっと現代文と同列になりうるのに、多くの場合目的を果たしたかのようにそこでストップしてしまう。(大久保廣行 [1985] 22-23 頁)

一方で、大久保が第三に掲げた「古典の世界に遊ぶ楽しさを味わわせ」ることは、「入門期の動機づけに当っては、文章だけに拘泥すべきではないのであって、ゆめゆめ読解技術の具としてのみ扱ってはならない。要するに、古典的世界に直接浸らせることを目的とし、そこに何らかの興味をひき起こさせることを第一に図るべきである」(大久保廣行 [1985] 21 頁)と、入門期に限ったこととして、その後の読解力獲得や作品内容の考察へ向けた手段にすぎないとした。しかし、「関心を深める」ことを目標として設定していた

学習指導要領だけでなく、「古典に親しむ」ことは現場でも目的化されているようである。

40年前の国文科の講読を専門的とし、教養教育としての古典のアクティブ・ラーニングを論じた塩田は「『日本の古典を学び、今を生きるための指針にする』、そのような当たり前の言説がそらぞらしく聞こえるほど、古典教育がないがしろにされて来たようにおもう」（塩田公子 [2016] 153頁）と記し、教養教育における例として、「竹取物語」「小倉百人一首」「源氏物語」を用いた講義例を示し、心がけることとして、「1. 古典素材に興味を持たせて、読んでみたい、勉強してみたいと思わせるための工夫をすること。2. 好奇心を抱いたときに、古典の原典が、正確に読み解けて、理解ができるための」（塩田公子 [2016] 144頁）力を身につけさせることの二点をあげている。後者は大久保があげた読解の基礎力養成と同一であり、前者は作品内容の考察へつながら可能性はあるが、「古典に親しむ」動機付けでもある。入門者向けの提言が、今や高等教育において目的とされたのである。

このように、古典に興味を持たせるための教育は、先述のアクティブ・ラーニングの事例紹介でも盛んになされている。書籍では、2018年に出版された河添房江編『アクティブ・ラーニング時代の古典教育：小・中・高・大の授業づくり』（東京学芸大学出版会）が古典に限定した特別な例であるが、国語教育に広げれば数は増え、論文に至っては枚挙に遑のない状況である。

河添は『源氏物語』『雨夜の品定め』の四種の挿話を題材にグループを組み替えるジグソー法で「当時の理想の女性像」をまとめさせる授業を紹介している。その効果として「古典に対して苦手意識をもつ学生が生き活きと授業に参加し、『源氏物語』の世界に親しみを持った点では、「教育実践演習」「古典文学演習H」でも一定の効果があつた」（河添房江 [2018] 240-241頁）と記した。アクティブラーニングは、「やり方次第で古典を苦手とする学習者に親しみを持たせ、積極的に授業に参加させることができる」（河添房江 [2018] 242頁）とし、「ジグソー法を実践したメリットは、何人かの学生がこれまで関心のなかった『源氏物語』の世界や当時の結婚形態などに興味を示し、もっと知りたいという意欲を喚起した点である」（河添房江 [2018] 243頁）と総括している。河添自身も、前掲のとおり「一定の効果」と限定的に記しているが、興味や意欲を喚起したところで授業としてはとどまっている。

このように目標までもが衰退してしまった理由は、言うまでもなく基礎力が身につけていないからである。河添は「ここ数年、学生の基礎学力がいよいよ落ちてきたということを実感する」（河添房江 [2018] 243-244頁）と述べ、それに対処するためにアクティブラーニングを大学の授業でも行えろとしながらも、「授業ばかりでなく、課外活動として行うのも効果的なのではないか」（河添房江 [2018] 244頁）と記している。

塩田が紹介した40年前の変体仮名による講読は、十分な基礎的読解力に支えられて初めて実現可能なものである。変体仮名は類似した字体が多いため、字形からだけでは文字を解読できず、古典文法や語彙を知っていて初めて正確に文字を解することができる。活

字を読むこととは異なり、文法的知識を活用し、辞書を引きながら初めて文字が読めるのであり、さらに辞書や参考書を用いて意味を理解し作品を読むのである。つまり、かつてこれだけの基礎力を養っていた高校国語の古典教育が現在は失われてしまったのである。

古典教育が衰退した理由を、大久保は「読書量の激減、古典芸術・芸能からの乖離、小・中・高で扱う教材と方法の一貫性のなさ、解釈技術一辺倒の画一的な一斉授業」(大久保廣行 [1985] 17頁)をあげ、さらに「何よりも科学技術優先の時代的風潮が慌ただしく今日を生きることを強いて、静かに過去を顧みる余裕を奪っている」(大久保廣行 [1985] 17頁)と述べている。これらの傾向は、その後拍車がかかったといえるだろう。塩田は「高等学校の現場では、古典教育が十分に行われぬ現状もあり、一方多くの私大の入学試験の科目の中から、古典教科が対象外となる昨今、大学の教育現場の学生達は、そろって古典が苦手になっている」(塩田公子 [2016] 153頁)と述べた。

高校での教育が不十分になったことで、基礎的読解力が身につかず、大学における古典教育も衰退した。大学教育における古典の存在感が減じたことは、入学試験科目から古典教科を削り、それが高校での古典教育をさらに欠落させるという悪循環に入ってしまったのである。そして、高校で入門者向けであった対策としての「古典に親しむ」が、高校でも大学の教養教育でも現在は目標とされてしまったといえるだろう<sup>iv</sup>。

### 2-3 現代語訳が否定される理由

目標が後退したことは前掲のとおりだが、古典を扱う際には文意を解釈するだけでなく、大久保が述べたように現代文と同様に内容の考察を目標とするべきだろう。類似の議論を、次のドナルド・キーンの新新聞寄稿「今も高い日本語学習熱 米国・イタリア滞在記」(『毎日新聞』2015年6月15日夕刊)にも読むことができる。

たとえば私の受けた印象によると、日本の高校生は古典文学を勉強することになっていても、多くの場合は実際に勉強するのは文学ではなく文法だけである。その目的は日本の傑作を楽しむ愛することではなく入学試験のためである。古典を現代語訳で読んで内容をよく理解し討論するようなことが至って少ない。結果は或る外国人の学生の方が日本の高校生より日本の文学や哲学を知っていることもあろう。また文法だけを覚えた高校生にとっては国文学は最も嫌いな学科になってしまう。なんと悲しく残念なことだろう。(キーン [2015] 8面)

キーンは、アメリカ・コロンビア大学で「日本における古典文学と哲学の教え方」というテーマで講演をし、イタリアの二大学で日本語を学ぶ学生と話した旅について寄稿し、日本の古典文学教育について苦言を呈しているのである。「古典を現代語訳で読んで内容をよく理解し討論するようなことが至って少ない」ということは指摘されたとおりであろう。小中学生の教科書には現代語訳が併記されているが、先に見たように高等学校の教科

書は一部をのぞき現代語訳が掲載されておらず、文意を理解することが重要視され、大久保も述べていた文意理解後に行うべき作品内容の検討は放棄されているようである。

前田賢一「古文・漢文より国語リテラシー」は、勝又基編(2019)『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信)に否定論者の発表内容として収録されているものだが、原文と現代語訳を比較し、「現代語訳の方がずいぶん長いですね。ですから確かに古文で、元の文を見た方がいいことは、あることはあるだろうというのは理解できます」(前田賢一 [2019] 40頁)とある。古文に限らず、どの言語であれ、訳す場合は解釈が含まれるので、その訳が唯一ではなく、別の解釈の可能性があるということ念頭に置かなければならない。1種類の訳だけを読みながら、他の可能性を推測するということが難しい。しかし、別の可能性を考えながら対象にあたるということは、文章読解に限らず重要であり、これこそがリテラシーといえるのではないか。

ドナルド・キーンが挙げていた、イタリアの日本文学を学ぶ学生がイタリア語訳を通して日本文学に触れているという事実からも学ぶことがあろう。日本語訳でイタリア文学など外国語文学を学ぶ場合も同様である。訳を通して内容を理解するという方法である。前述のとおり小中学校の教科書には古典の現代語訳が掲載されている。高校国語の古文は、小口が「参考書の丸写し」(小口倫司 [1983] 81頁)と書いたように、多くの参考書に現代語訳が掲載されている。したがって、実際には多くの学生が、すでに現代語訳で古典を理解しているといえるだろう。つまり、日本の学生の古典嫌いは、現代語訳で読ませないことではなく、その現代語訳の質や、現代語訳を読むことに否定的な考えがつきまとうこと、さらには「その目的は日本の傑作を楽しむ愛することではなく入学試験のため」(キーン [2015] 8面)と書かれているように試験勉強目的であることなど、別の問題に起因するのではないだろうか。

以上、大学における古典文学教育が1980年頃から大きく衰退し、そのきっかけに高等学校学習指導要領の改訂があり、この衰退が古典教育の目標をも後退させたこと、現代語訳を通して内容に触れることが実際には行われていながらも否定されていることを述べてきた。

## まとめ

古典教育の目標として、大久保は古典読解の基礎力をつけることと内容探求をあげていた。他の古典作品を自分の力で読めるようにするため、基礎的な読解力をつけるという目標は、現在でも継承されているが、現代文のように作品の内容探求をすることは、大多数の高校国語の検定教科書を見るかぎり、半ば放棄されているようにも考えられる。その代わりに掲げられたのが「古典に親しむ」ということである。「春はあけぼの」を題材とした「自然理解(日・中・英文学における「自然」)」の目的は、基礎的な読解力をつけることでも、「古典に親しむ」ことでもなく、題材に見られる自然の捉え方をつかみ取ること

だった。もちろん、これは古典文学の授業ではなかったから実践できたことであるが、このように、作品探求だけでない派生的な目標を据えることも古典を読む上で重要な動機となり、また目標にもなり得るのではないだろうか。そして、これも古典を学ぶことの利点のひとつと考えられるだろう。すなわち、過去の物の見方を学ぶということである。

古典教育の必要性はさまざまに論じられているが、この授業実践からは古典を専門に学んでいない学生であっても、グループ・ディスカッションでの対話を通して、様々な角度から題材を論じ、そこに残された物の見方を学びとった。過去の物の見方は、現在の我々の物事の捉え方と似ているところもあれば異なるところもある。このように、我々の視座を対象化できることこそ、異なった時代や土地のテキストに触れる意義であろう。我々と異なった物の見方をする人々は、過去にも現在にも存在し、その異なった見方を想像することは現代社会において欠かせない。古典を学ぶことは、現代社会を生きる上で、「人生を豊かにする」以上に実践的な力を身につけることではないだろうか。

高校までの古典教育に依拠する形での大学での授業実践を紹介し、古典教育の変容、目標の後退、現代語訳否定について論じた。「古典離れ」は、一般的に社会生活の変化などから自然発生的に生じたことのように理解されているかもしれないが、極めて意図的に古典から離れようと画策された結果であるといえるだろう。上記の古典学習の利点を考えれば、「古典離れ」の不利益は非常に大きい。そもそも、「日常の社会生活を営む上での言語の能力」(小林一仁 [1976] 9頁)を養うことは、文学や古典を排除する理由にはならない。こうした二項対立的な思考こそが40年間同じ問題を解決せずにきたのではないだろうか。

### 《引用・参考文献》

- 猪川優子 [2019] 『「枕草子」「春はあけぼの」段の授業構想』『広島文教教育』33, 35-43
- 伊藤和行・氏岡真弓 [2021] 『「現代の国語」に「羅生門」はNG? 高校教科書めぐり起きた波紋』『朝日新聞デジタル』2021年9月12日
- 大久保廣行 [1985] 「高校生の「古典離れ」を食い止めるために——若き国語教師への提言」『国文学論考』21, 17-23
- 小口倫司 [1983] 「新教育の発掘—古典離れの生徒をどうするか」『月刊国語教育』3 (1), 80-83
- 河添房江編 [2018] 『アクティブ・ラーニング時代の古典教育：小・中・高・大の授業づくり』東京学芸大学出版会
- キーン, ドナルド [2015] 「今も高い日本語学習熱 米国・イタリア滞在記」『毎日新聞』2015年6月15日, 夕刊8面
- 小林一仁 [1976] 『「国語」は日常の言語生活を中枢に (試論): 古典離れ、文学離れの「国語」へ』『高校通信東書国語』通巻155号, 1976年9月号, 5-9
- 塩田公子 [2016] 「古典の教養教育とアクティブ・ラーニング」『岐阜女子大学紀要』45, 154-143
- 高瀬桃華 [2020] 「高等学校『枕草子』における多様な解釈の可能性を探る教材案：「春はあけぼの」を用いて」『古典教育デザイン』(4), 50-55
- 竹久康高 [2019] 『「言葉による見方・考え方」を働かせる古典学習：『枕草子』「春はあけぼの」章段の表現特性を探究する』『高知大学学校教育研究』(1), 165-176
- 竹久康高 [2020] 「古典作品を教材とした「深い学び」の実現をめざして：『枕草子』「春はあけぼの」

- の授業実践』『国語教育研究』(61), 56-67
- 内外教育 [2021] 「1・5%減の2949万冊 ●21年度高校教科書採択状況—文科省まとめ(上)」『内外教育』2021年2月12日, 6-12
- 内藤一志 [2006] 「古典教育有意義論の行方:「古典に親しむこと」を考える契機として」『月刊国語教育研究』41(405), 4-9
- 前田賢一 [2019] 「古文・漢文より国語リテラシー」勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信, 37-50
- 文部科学省 [1978] 『高等学校学習指導要領(昭和57年4月施行)』<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s53h/chap2-1.htm>
- 文部科学省 [2010] 『高等学校学習指導要領解説国語編』[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afldfile/2010/12/28/1282000\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afldfile/2010/12/28/1282000_02.pdf)
- 文部科学省 [2017] 『高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)』<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h30h/chap2-1.htm>

## 注

- i 教科書検定では、第一学習社が申請し合格した「現代の国語」4点のうちの1点に芥川龍之介「羅生門」、原田マハ「砂に埋もれたル・コルビュジエ」、夏目漱石「夢十夜」、村上春樹「鏡」、志賀直哉「城の崎にて」の5編の小説が掲載されていたことが報道され、検定基準の曖昧さが問題となっているほか、文学素材を必要とする高校の現場と文部科学省の乖離が指摘された。(伊藤和行・氏岡真弓 [2021] ほか)
- ii 高瀬桃華 [2020] に紹介されているほか、東京書籍の『新編国語総合指導書』にも、「春はあけぼの」を含む同教科書の「古文に親しむ」に採録された教材の小中学校教科書での採録状況が示されている。また、中学の教科書については、猪川優子 [2019] の分析がある。
- iii たとえば三省堂の『明解国語総合改訂版』(国総339)や『高等学校国語総合古典編改訂版』(国総337)の「古典の響き」などに、音読の勧めている様子を見ることができ、各教科書は図版など視覚資料を積極的に用いている。
- iv 「古典に親しむ」ことを提唱することの問題点は、内藤一志 [2006] が論じている。